

「 さ さ え 」

2018年 7月発行 情報誌 第64号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所: 福岡県田川市伊田 4395 (福岡県立大学内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail npo-fukusiyogunet@sage.ocn.ne.jp

新 URL <http://npofukusiyogu.sakura.ne.jp>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神1丁目13-5

福祉用具はあなたの自立をささえます。

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします。

NPO福祉用具ネットは『抱え上げない介護技術』を推進します。写真のような介護はやめましょう。



洗髪シャワー



NPO福祉用具ネット開発品第1号

【製造元】

(株)福祉SDグループ

平成27年より、充電式も発売開始。

【発売元】キヨタ(株)

これまで、NPO福祉用具ネットが関わった
主な開発協力品 (現在は製造中止となっています。)



アルファブラ
ソラ クッション

SORA



尿吸引ロボ「ヒューマニー」



特定非営利活動法人

NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育てていきたい…」

福祉用具と個人の尊厳

NPO福祉用具ネット理事長 豊田謙二（熊本学園大学シニア客員教授・博士）

個人の意思を尊重するために

人間としての生活の毎日は、食べて、働いて、寝て、その間に排泄がある。この日々の習慣は、「働くこと」を別にすると、人間だけでなくペットなどの動物にもまた共通である。つまり、この過程は「生物学的自然」と言うべき新陳代謝過程にほかならない。

だが、ペットなどとは異なる、極めて重要な「人間的」な部分がある。たとえば、「排泄」について。モンゴルでは「トイレは？」と尋ねると「お好きなどこで」と答える。周りはすべて果てしない草原である。20年ほど前の中国では、男女とも区別なく「戸板」だけの開放的な、いわば流し場で処理されていた。もちろん、水洗トイレは今日の原風景である。だから、異様なほどに日本のトイレは清潔度・プライバシー・利便性において世界の最先端を走っていると思われる。もちろん、「多目的トイレ」の設置も世界のトイレ最先端文化に相当している。

こうして「トイレ」、あるいは「レストルーム」が前述のような「近代化」に向かって、その先導を日本が担っているように思えるのだが、さて、重要な点は、その「排泄」の場としての「トイレ」が個人の意思を尊重する方向に動いていることである。

つまり、人はだれも、他人にみられる風景のなかでの排泄を好まない、という点である。

生活と福祉用具

福祉用具の本格的な導入の画期としては、「介護保険制度」の施行以降であると思われる。では、今日の福祉用具活用の現状について評価すれば何点なのか、あるいは他の先進諸国と比較して日本はどのような水準なのか、という問いに応えるには同じ質問票で当該諸国に調査する方法しかないのである。

それは財政的にも、方法的にも課題が大きすぎる。そこで、国際的に信頼できる基準に準拠することがベターである。

福祉用具の活用は、「機能障害を消し去りはしないが、特定の領域の生活機能における諸制限を取り除くことができる」（14頁）

上記の引用は、WHO（世界保健機関）『ICF国際生活機能分類』（2002）に依拠している。

少し、この「ICF」（International Classification of Functioning Disability and Health）について、福祉用具を巡って、その要点を紹介したい。ICFの極めて重要で国際的な、そして日本における障害者福祉に関して、まず決定的な影響を与えた、核心を以下に記したい。

その核心を二点に限って紹介する。

1. 「障害」概念の転換

このICF以前では、障害は個人の身体のハンディであるから、個人のリハビリ等の努力で社会復帰を進めるべき、とした。だが、ICFは、障害のある人が生活しにくいのは、「社会」の側に問題があり、「社会」つまり生活圏域での諸種のバリアフリー化によって日常生活が可能になる、と説いたのである。

つまり、「障害」の問題性は「社会」にあり、と言う。

2. 医学モデルと社会モデル

障害のある人への支援に向けて、ICFは医学モデルから社会モデルへの転換を迫っている。

医学モデルでは、障害のある人はその障害は個人の「問題」であり、したがって個別的な治療が必要という。他方、社会モデルでは、「障害」は社会が創るものであり、社会環境によって創られるものである、という。したがって、その課題の解決には、社会的障害の除去に向けた活動が望まれるのである。

排泄支援ロボットの登場

さて、本題に入りたい。「排泄支援ロボット」は排泄に関わる、当事者と介護者への支援をコンセプトとしている。その開発の基本コンセプトは、「ロボットであれば、排泄の世話をしてもらっても恥ずかしくない」、というロボットの優位さにある。以下、4種類の「排泄支援ロボット」を紹介して、責めを塞ぎたい。

① 超音波で膀胱のふくらみを検知する、②ベッドサイド水洗トイレ、③車椅子から便座への乗り移り支援用具、④排泄への歩行支援における介護支援。

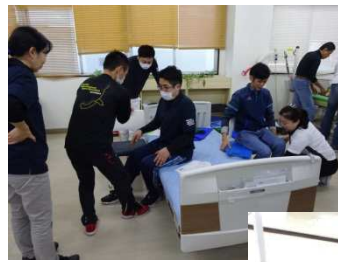
用具の開発は進む、そのキー概念は依然として当事者の意思の尊重であろう。

～高知県『なちゅは』合宿研修～

『技術認定チェック（ナチュラルハートフルケアネットワーク主催）』

参加報告

平成30年に入ってすぐの1月6日（土）から8日（月）にかけて中尾三枝子さん、山形茂生さん、井内陽三さんの3人が「高知県合宿研修」に参加しました。この3人は、『抱え上げない介護を当たり前のケアに！』の活動を継続している仲間で、その仲間の中からNPO福祉用具ネット事務局より選抜され合宿研修の参加権利を得ました。その3人から臨場感あふれる報告をいただき、今後の活動のさらなる充実と発展に広がることを願っています。皆さん！ぜひ、『抱え上げない介護を当たり前のケアに！』という考えを広げていく仲間になってください。



伸び代発見！

(株)クオリティ サービス提供責任者

中尾三枝子（介護福祉士）

今回の高知合宿に行かせて頂いた事。まずは NPO 事務局の大山さんや、メンバーの皆さんに感謝申し上げます。

到着するや否や『技術認定チェック』がどんなものか、自分のスキルがどの程度なのか、何も気にせず行ってしまった事を後悔する事になろうとは・・・今思い出しても恥ずかしくなります。

毎年、下元先生の研修会に参加して、尚且つおむつフィッター2級・1級でも受講していて、『抱え上げない介護』『身体の使い方』は解っているはず、でした。

ところが、チェック項目の一覧を目にした途端、頭が真っ白です。チェック前日、つまり高知に到着した日の夜、自習の時間に一通りやってみましたが、身体もカチカチ、言葉も出ない。

来た事を後悔するしかありませんでした。

しかし、ここに来たかった人、来るべき人が居たならその方達に申し訳ないと思い、逃げ出したい自分を奮い立たせ当日を迎えました。

当日は、勿論撃沈でした。一通り認定チェックを受け一発合格！は1項目も無く、狼狽えるしかありませんでしたが、2順目チャレンジできると聞き、出来てない箇所の少ない項目から再チャレンジさせて貰い、何とか数項目合格を頂く。と言う始末でした。

この3日間はとても濃厚で、技術認定チェックのカリキュラムはもちろん、埜田先生の『労働安全衛生について』や浜田先生の『人と暮らし・ケアの基本を考える』など、なぜ、抱えてはいけないのか、そして、地域の中で自分が出来る事は何か？など、集中して考える事が出来ました。

いつも大山さんが自己研鑽の研修受講ではダメと言われますが、福岡に帰ったらこれを自分がやるんだ！と言う意気込みを持つしかない状況でした。

認定チェックで撃沈した夜の懇親会で下元先生の前で情けなくて出た言葉が『私、この年になっても伸び代がある事が分かりました。次にお会いするまでに伸びておきます』と言ったのです。

なんと恐れ多い事でしょう。

高知で連日連夜、私たちが到着したその時間まで、準備をされていた皆さんのサービスマインドとホスピタリティに感動し感謝して、今後NPOでもこの様な形で仲間づくりが出来たらと思っています。



高知県の合宿に参加して

コネクト リハビリテーション代表

山形茂生（作業療法士）

昨年の12月に高知県でナチュラルハートフルケアネットワークの合宿があるから

「NPO福祉用具ネットの代表の一人として参加していただけないか」

と大山事務局長にお誘いを受けて参加させていただきました。

「合宿」ですから、「特訓的なことをするのか」くらいの軽い気持ちで参加しましたが、内容は全く違いました。チェッカーと呼ばれる確認して下さる方の前で、寝返りの介助やシートを使用しての体位移動、トランスファーボード、リフトの使い方など9項目について、説明し漏れがないかの確認してもらいます。私の認識として、始めは説明すればいいのかと思っていましたが、途中から患者・利用者の家族や使い方を知らない職員に説明をするように、自分の中で変更していきました。説明をするも、チェックシートで説明不足部分があれば不合格となり、私も他の参加者も合格しようと必死です。今振り返ると、50歳の男の技術チェックをしていた方々もやりづらい思いをしたのだらうと思いますが、行っている最中はこちらも必死です。人に伝えるのなら「もう少しわかりやすい言葉でシンプルに」しなくてはならない部分や、「なぜこのことが必要なのか」しっかり伝えなくていけないこと」など場面に応じて伝え方を変える難しさも痛感しました。

朝からチェックを受けていきますが夕方になると、チェックを受ける緊張と、日ごろ使わない脳をフル回転させた疲労が蓄積され、テキストを読み返しても頭に入らない状況まで追い込まれました。参加された皆さんは、最後まであきらめずに、チェックを受けていましたが、私は夕方にはすでに放心した状態でした。お恥ずかしい話になりますが、全ての項目を合格することができずに、プライドは、打ち砕かれた状態で帰路につきました。しかし、この合宿を振り返るとペアになった、ふくよかな井内さんをケアするハンディを背負ってのチェックによく頑張ったと思い返しました。

合宿に参加して、苦い経験をしましたが、この年齢になって不足部分を指摘してもらえありがたさは、時間の経過とともに増してくる幸福感について、貴重だと感じられるようになりました。

大分県も、いよいよ今年から「ノーリフティングケア」に取り組んでいきますので、高知での合宿やNPO福祉用具ネットの勉強会などを生かして、この事業に役立てたいと思います。



「高知での学び」

あみぞらの里行橋 訪問看護ステーション

井内 陽三（理学療法士）

今年初め、1月の6～8日の3日間、ナチュラルハートフルケアネットワークの合宿に参加させていただきました。NPOメンバーの他に佐賀、熊本の方と一緒に福岡～高知までフェリー、車で移動。気分は小旅行。移動時間は、とても楽しく過ごせました。

本題の合宿内容は、大きく3つの内容で開催されました。技術チェック、講義、「地域でのこれからの取り組み」を話しあうグループワーク。

技術チェックは、講師として伝えるための認定試験です。9項目を1つずつ、実技、プレゼンテーシ

ョンを含めて試験を受けます。この試験を受けるため全国から多くの人が集まっていた。前日には、実技の確認練習の時間がありましたが、その時から、会場内は熱気を帯びた状態になり、私も今までにない緊張感を感じました。その熱気に包まれながら、早速NPOメンバーとお互い確認しながら練習。

翌日、試験に突入しました。この試験、受かるまで何回でもチャレンジできる方式。チェックを受けるごとに、可否に関わらず様々な指摘や修正を受ける事ができました。このことが大変よい勉強になりました。自分では気づけない介助時の癖や未熟な技術のポイントなど、本当に自分が磨かれていくように感じました。しかし、プレゼンテーションをしながら、実技を行うことに慣れないこともあり、精神的には大変疲れました。この疲れを癒すのに全国各地から参加の方が持ち寄った銘菓のお土産、最高でした。

講義は、二つあり、一つは、産業医の埴田先生の「労働安全衛生を考える」。この中で、労働者を守る様々な法律や規制があることを学びました。しかし、一番印象的であったのは、医療・福祉の教育で、自分自身の身を守る教育が十分なされていない。今まで自身が思っていなかった教育の刷り込みがあることを学びました。

もう一つはむつき庵の浜田先生の「人と暮らしケアの基本を考える」。言葉の使い方を通して、自分で考える事の大切さ、その意味を考える事の大切さを学びました。また、そこから「自分」と「相手」がいて関係が成り立つ。シンプルですが、忘れてはいけない、ケアの根っこを学びました。

滞在中、朝市を通ることがあり、多くの露店が並んで、活気がありました。その中においしいそうなみかんが並んでいて、無性に食べたくなり。「無農薬」の文字に惹かれ、少し日に焼けた、不愛想なおじさんのお店で購入。不恰好だけど、とってもおいしく、高知の元気をもらえたように感じました。



懇親会の集合写真

北海道から沖縄までの地域から、選ばれた52名の『なちゅは』のメンバーが集まりました。その中に、NPO福祉用具ネットに対して、3名の参加枠を頂いたのです。本当に感謝です。



九州地域からのメンバーが勢ぞろい九州全域でネットワークを組んで、抱え上げない介護を目指して、力を合わせたいと思います。



佐賀、熊本の皆さんと共にフェリーでの行き、絆をしっかりと深めることができました。

当たり前前の介護が、あたりまえでないと知った日

～患者家族の声～ 患者家族Dより

親の長い入院生活が終わり施設での生活が始まった。入院中は当然のことながら治療優先であり、もっとこうしてやりたい、ああしてやりたいという家族のちょっとした看病の工夫がやりづらいこともあった。しかし、施設では日常生活に戻れるので、親が生活しやすくより心地よい生活を送るための当たり前前の工夫＝介護生活ができるものと期待していた。と、同時にこれまで患者家族として学んできた介護技術を親のために実践できるという意欲が湧いてきた。

期待は入所とほぼ同時に薄れてしまった。施設では、私が実践しようと思っていた「抱え上げない介護」は取り入れられていなかった。期待感が裏切られた時、しばらくの間、気分が落ち込んだ。施設に期待をしていた私に対し、「お前は求めすぎだ」と家族が言い始め家族間でも不穏な空気が流れた。「本当に自分は求め過ぎか。当たり前前のことを言っているだけじゃないのか。」と、悶々とした時間が過ぎた。

しかし意欲は残った。

寝たきり状態に近い親のためにT社から購入したポジショニングクッションを持ち込み、できるだけ力を抜いて寝ておられるようにしてあげようとした。すると、非常勤セラピストの先生からクッションを置く動きを妨げてしまうので、置いてはいけないと言われた。園からはその方針に従わなければ、他の施設に移って欲しいとまで言われた。除圧をしてあげ緊張をとるようなポジショニングをしてあげることは、自分の中では当たり前前の介護だった。が、園では当たり前ではなかった。

諦めきれないので、自分が対応するときには、クッションを用いたポジショニングを取っても良いという許可をセラピストからいただいた。そのポジショニングだと親の緊張が取れていることに気づいてくれたのか、最近では、スタッフさんも真似てくれている時がある。でもときおり、立膝状態で麻痺側のふくらはぎと太ももがくっついてしまっているときもあり、ドキッ！としてしまう。親は、咳をただけで筋肉がギュッと縮むようで、簡単に体が閉じてしまう。閉じそうになってもクッションで楽になって緊張が取れ、筋肉が緩んでくれると良いなといつも、祈っている。

また、グローブを用いて除圧をしたり、抱えずにシ

ートを用いてベッド上を移動したりすることも、当たり前ではなかった。スライディングボードを用いてベッド⇄車いすの移乗も当たり前ではなかった。ボードやシートを始めてみる人もいた。最近では、たまにボードを使ってくれている様子が見える。そのような時は、とてもうれしい。

車いすのティルト機能、リクライニング機能の役割を知らないまま、車いすを使用していることも少なくない。そのため親以外の方で、前滑り状態になって今にも、お尻が落ちそうな状態もみかける。そこで、親の車いすにはティルト、リクライニングの順番を示したカードをぶら下げることにした。親の介護計画には、自分が書いた「カードの指示通りに実施すること」と記載されている。中には実施できていないスタッフもいるが、ほぼほぼ実施できるようになってきた。良かった。

さらに車いすに身体がねじれたままの状態です座らせられ、食事をしていることがある。自分で姿勢を整える力がないためそのまま。面会時たまたま、そのような場面に出くわすと、胸が痛む。自分がその姿勢のまま長時間座っていることを想像すると、どれほどきついことだろう。スタッフさんがちょっと想像してくれるとありがたいが、忙しい様子で想像する暇もなさそうだ。

家族が胸を痛め凹んだままでは親は楽にならない。だから、自宅から持ち込んだスライディングシートを持ち出して座り直しをしてあげるようにしている。その時には、関心を持ってくれそうなスタッフさんにシーティング方法を伝えるようにしている。気が付いた時に、実施してくれたらラッキー！と思うようにしている。多くは望まないのがベターかなと感じている。

こんなことを書いている自分は、実は介護職でもセラピストでもない。親にできるだけ楽な介護をしてあげたいと思い研修会に参加し学んでいる患者家族だ。

患者家族の自分が知っている「当たり前」の知識や技術が介護の専門家に知られていないという実態を目の当たりにしている自分。「どうして、患者家族の自分が当たり前前と思い実践できることをあなたたちは知らないんだ！（怒）」と時折、大爆発しそうになる。

しかし、大爆発したら明日から生活しづらくなるのでぐっとこらえている。ぐっとこらえながらどうやって伝えていこうかと、作戦を練る毎日である。

「平成30年度 通常総会のご報告」

NPO福祉用具ネット副理事長 坂田 栄二

平成30年5月26日午後2時から、福岡県立大学3号館3109講義室で、「平成30年度 通常総会」が開催されました。

まず大山事務局長より正会員数、出席者数が確認され、出席者は、正会員数121名の内、92名が出席（この内、表決委任者73名）し、NPO福祉用具ネット定款第24条に規定の開会定足数（正会員総数の2分の1以上の出席数）を充足し、総会開会が成立したことが報告されました。

まず、総会の進行役を担う司会者として、出席者により井内理事が推薦決定され、司会を務めることとなりました。いよいよ総会の始まり。順に紹介します。

まず、副理事長による開会の宣言、続いて豊田理事長の挨拶がありました。



理事長は、NPO福祉用具ネットの創設から16年目を迎えるまでの紆余曲折の苦労話があり、このNPOが地域に大きな貢献をし、今、介護技術の変曲点に差し掛かっており、会員の協力がどれだけ必要なことを訴えました。

最初の議案1は、議長選任、議事録署名人の選任。

司会者より議長の選出が求められ、議長は、出席者の全員一致で山形理事が指名され、議長席へ。

議長は、議事進行にあたっての円滑な進行になるよう出席者に協力を求め、審議に移りました。

議案2は、平成29年度の事業報告及び決算報告、監査報告です。

事業報告で、理事長は次のように説明しました。

NPOには、4つの大きな事業があります。中でも29年度は、創立15周年記念事業として、次の2つの事業に注力しました。

①研修事業：「抱え上げない介護技術」の普及活動。

9月に、3日間を掛けて、約100名の参加者にノーリフティングケアの考え方、その活動を推進する指導者育成、高度のケア技術の伝道師となるリーダー養成を行いました。

更に、11月に開催の西日本国際福祉機器展で、周辺地域の多くの人に、この活動をアピールしました。



これらは、3つのTV放送局から放送され、注目を集めました。

②開発事業：QOLを高め、介護者が働きやすい福祉用具の開発支援。

この支援は、福岡県からの委託事業です。

第一段階の29年度は、どのような福祉用具が求められているか、そのニーズを介護現場から拾い出すニーズ調査を行いました。1,500施設にアンケート調査およびヒアリング調査を行い、真のニーズの見極めを行いました。既にいくつかのテーマは、強い意欲を持った企業により開発が進んでおり、ものづくり支援センターが中心となって企業支援を行っています。

その他の2つの事業も継続的かつ順調に遂行されました。

その結果としての決算報告は、事務局長より行われ、黒字決算となったことが説明されました。

監査報告では、佐々木、船津監査人から、会計処理は適正に行われた旨の報告があり、出席者全員から承認されました。

議案3は、平成30年度の事業計画（案）及び活動予算（案）です。

順調に推移した平成29年度の事業内容を、踏襲し更に高台に引き上げる決意が、理事長及び事務局長より発表され、承認されました。

その他の議案も全て承認され、新しい年度のスタートです。

最後に吉村理事より閉会の言葉がありました。



「このNPOが取り組んでいる介護現場を変える活動は、繰り返しメディアで取り上げられ、多くの方に注目されており、

私も機会あるごとに、NPOの活動を紹介している。この地域を変える動きを皆さんが一体となって更に押し進めていただきたい。」こころ温まる言葉でした。

事務局だより

《30年4月から6月までの事務局のうごき》

平成30年3月の追加

福岡県委託事業報告書作成

- 3月14日 事例相談
- 3月17日 企業相談対応
- 3月19日 開発相談
- 3月27日 企業相談対応 事例相談
- 3月31日 決算

平成30年4月

- 4月3日 福岡県庁
- 4月5日 開発相談
- 4月6日 開発相談
- 4月9日 開発相談
- 4月11日 開発相談 2社
- 4月12日 開発相談
- 4月13日 開発相談
- 4月18日 企業支援
- 4月24日 開発相談
- 4月25日 福祉用具研究会
- 4月19日～21日 大阪バリアフリー展
- 4月27日 開発相談
- 4月28日 理事会
- 4月29日 抱え上げない介護学習会

平成30年5月

- 5月1日 事例相談
- 5月11日 監査
- 5月15日 開発相談
- 5月19日 キネステ体験講座
- 5月21日 研修会新企画作成
- 5月23日 出前講座
- 5月24日 開発相談
- 5月26日 30年度通常総会 開発相談
- 5月27日 学習会
- 5月29日 法務局NPOセンター報告書提出
- 5月30日 開発相談 東京

平成30年6月

- 6月 情報誌64号発行準備
- 6月4日 開発相談 事例相談
- 6月7日 企業相談
- 6月8日 開発相談
- 6月16日 心のケア研修会
- 6月18日 福祉用具研究会
- 6月23日 出前講座
- 6月24日 学習会
- 6月29日 開発相談

情報誌ささえ64号 編集・校正・印刷・発送準備

《今後の予定 7月から9月まで》

- 7月7日 キネステ体験会
- 7月29日 抱え上げない介護学習会

特別企画 メンタルヘルスマニ勉強会スタート

- 8月26日 抱え上げない介護学習会
- 9月7日・8日 おむつフィッター3級研修会
- 9月15日・16日・17日 抱え上げない介護イベント

抱え上げない介護を当たり前のケアに！

日時 平成30年9月15日・16日・17日の3日間

会場 福岡県立大学

- ◆一部 平成30年9月15日(土) 10時～17時
参加費 会員2000円 非会員3000円
申込締切 8月31日 所定の申込用紙あり

10時～11時

「人手不足倒産が医療介護を襲う！解決方法はこれしかない！」

(一社) こうしゆくゼロ推進協議会 副代表 石橋弘人氏

11時～12時30分

「介護の現状と抱え上げない介護へ期待したい事」

(一社) ナチュラルハートフルケアネットワーク

代表 下元 佳子氏

13時30分～15時30分 パネルディスカッション

「変えよう、変わろう、

これからの医療や介護の現場を！」

(司会) 豊田 謙二氏 NPO福祉用具ネット理事長
(パネラー)

「施設の実践報告」

須藤 秀作氏 特別養護老人ホームふじの木園 施設長

「両親の介護を通して感じたこと」

左 広美氏 NPO福祉用具ネット 理事

「大分県の取り組み 紹介」

山形 茂生氏 NPO福祉用具ネット 理事

「福祉用具貸与事業所の新たな挑戦」

川上 徳高氏

太陽シルバーサービス(株) 営業部営業支援課課長

(コメンテーター)

(一社) ナチュラルハートフルケアネットワーク

代表 下元 佳子氏

15時30分～17時

抱え上げない介護に必要な福祉用具の紹介と

抱え上げない介護技術の実技指導

- ◆二部 9月16日(日) 9時30分～15時30分

活動報告会と新たな挑戦に向けて

参加費 非会員2000円、会員500円

プロジェクトメンバー1000円

申込締切 8月31日 所定の申込用紙あり

- ◆三部 9月16日(日) 16時～20時

9月17日(月) 9時～16時

技術認定チェック

対象者 プロジェクトチームの関係者